

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1020 号	氏 名	石 井 宏 明
論文審査担当者	主 査 池 田 宇 一 副 査 角 谷 眞 澄 ・ 石 塚 修		

(論文審査の結果の要旨)

本研究では、当科で経験した原発性アルドステロン症 (PA) 症例のデータを解析し、アルドステロン産生腺腫 (APA) を非侵襲的に予知すること、つまり副腎静脈サンプリング (AVS) 検査を積極的に進めるべき症例を予知する因子を探索した。

2009年4月から2013年3月までの4年間に糖尿病・内分泌代謝内科でPAと診断した81症例のうちAVSを施行した59症例とその中で迅速ACTH負荷試験を施行した28症例について、AVSによる局在診断の結果(片側アルドステロン過剰分泌をprobable APA、両側アルドステロン過剰分泌例をprobable IHAとそれぞれ定義)をもとにROC解析を用いて迅速ACTH負荷試験の有効性について検討した。

その結果、石井は以下の結果を得た。

PA診断症例のうちAVS施行症例は59例で男女比27:32、年齢は平均53歳、治療前の平均血圧144/88 mmHgで治療一か月後の平均血圧は131/82 mmHgと有意な低下を認めた。検査データでは平均血漿アルドステロン濃度(PAC) 378 pg/ml, 平均血漿レニン活性(PRA) 0.14 ng/ml/hr, 平均血清K値 3.4 mEq/lであった。AVSによる局在診断では、32症例をprobable APA、17症例をprobable IHAと診断した。手術を施行したprobable APA 26症例において、25症例は病理学的にAPAと診断され、1例のみ過形成と診断された。

AVS症例のうち迅速ACTH負荷試験の施行例は28症例で、probable APA群17例、その他の群11例であった。群間で各種パラメーターを比較したところ、血清K値とACTH負荷試験前後のPACで有意差を認め、probable APA群で明らかな血清K値の低下、PACの上昇を認めた。このことからPAC/血清K値(APR)の有効性を検討した結果、ACTH負荷試験後において顕著な有意差を認めており、ACTH負荷試験における複数のパラメーターをROC解析にて評価した。ACTH負荷試験30分後のAPRにおいてcut offを102.6とすることで感度94.1%、特異度90.9%を得た。

これらの結果より、PA患者において、ACTH負荷試験によるAPRがAPAの診断に有用な可能性が示唆された。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。